

シンポジウム 2

育児の環境整備

—保育園と幼稚園の一元化：認定子ども園を考える

保育園看護職の健康支援

藤 城 富美子 (杉並区立久我山保育園看護師)

I. 看護職に求められる役割

1998年(平成10年)「乳児保育の一般化」が図られ、産休明け保育など低年齢の入園が増えています。また保護者の就労に合わせた夜間・長時間保育、アレルギーなど慢性疾患の対応、障害児保育の低年齢化など、多様なニーズへの対応が保育園に求められています。このような中、子どもたちが抱えている疾患や異常の早期発見のための観察の眼がますます重要となり、感染症の蔓延による病気の悪化や余病の予防など、保健面での正しい知識・対応が求められています。

保育園の大きな特徴は、保護者の就労を支えているということです。当園では、乳児からのお子さんを含め105名のお子さんをお預かりしています。保育時間は土曜日も含め朝7時30分から夕方19時30分までです。その内の7～8割の子どもたちが18時30分までいます。そして、0歳2人を含め25名の子どもたちは19時30分までの保育になります。このように10～11時間の長時間集団で密接に関わることで、病気や感染症、怪我とさまざまな健康に関わるケアが必要となります。それでは、子どもたちの健康の実態と看護職の関わりをお話したいと思います。

II. 保育園の看護職配置状況

保育園の看護職配置は、乳児保育の実施に伴って1960年代頃より自治体の施策として都市を中心に進んできました。そして、昭和43年に国として配置が通達されました。

看護職配置の目的は、乳児の疾病の早期発見と感染症蔓延の予防があげられています。

配置基準は、乳児が9人以上入所させる保育所には配置が義務づけられています。しかし、9名未満では置くことが望ましいとの表現になっています。

看護職の配置枠は、保育士の定数内配置です。東京や大阪など一部の自治体を除く、7～8割の看護職が、0歳クラス保育士の1人として数えられ保健業務を兼務しているため、十分にその専門性を活かした業務ができていない現状があります。

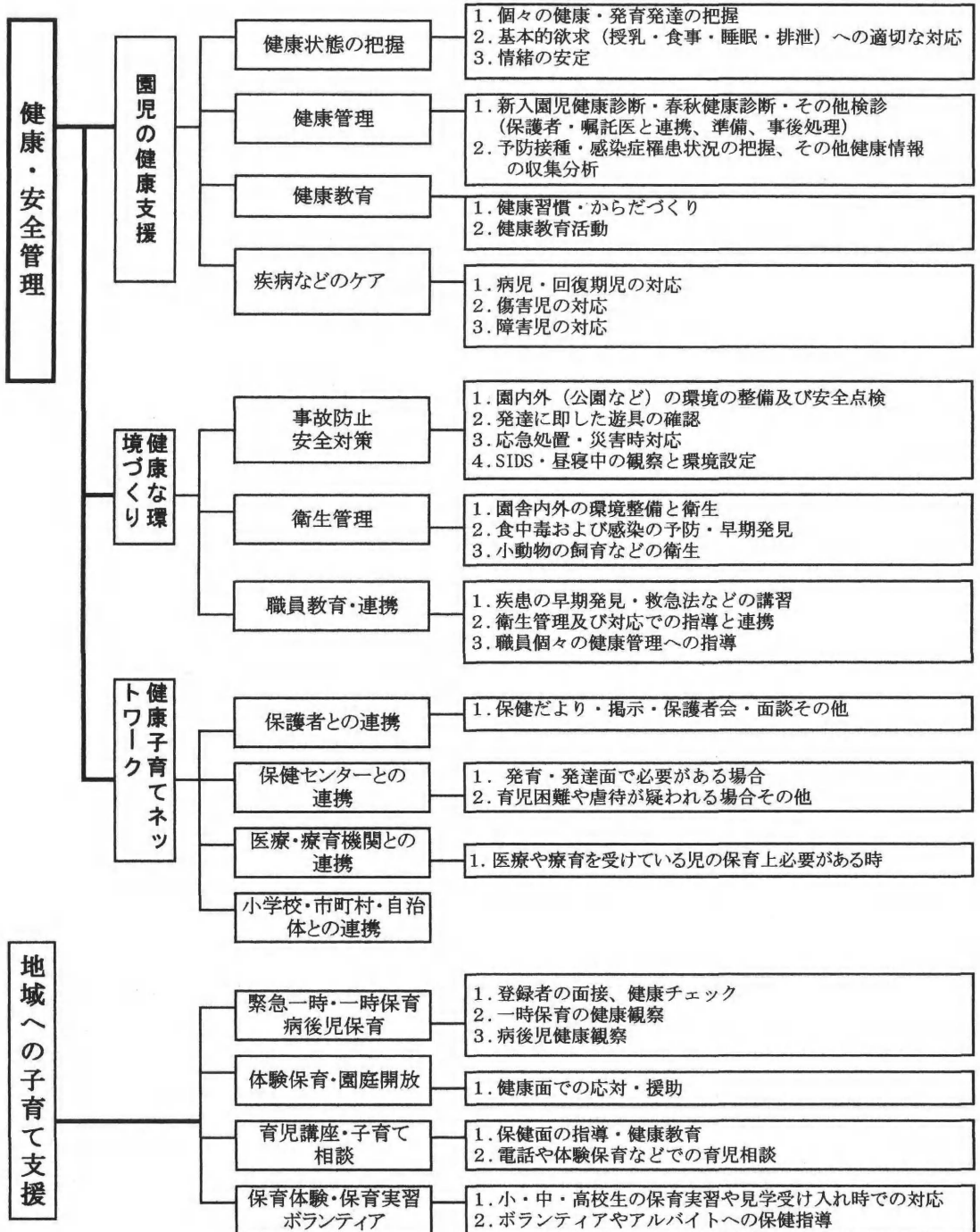
看護職数は、平成17年度全国の認可保育園22,624箇所 constants 常勤看護師は、4,417人と、わずか2割程度の配置にしすぎません。しかし、厚生労働省は、今後、5年間ですべての保育園に看護職配置の予算要求をしておりますので、今後増えていくだろうと願っています。

III. 保育園看護職業務活動領域

保育園保健業務は、配置状況の違いや施設側の考えなどにより業務内容もまちまちで個々の経験に任されているのが現状です。そこで、2005年12月に全国保育園保健師看護師連絡会が「現状の看護職の業務に即した」また「求められている」保育園看護職の業務領域(資料1)を作成しました。

1つ目の柱は、園児の健康・安全管理です。園児と取り巻く人的・物的環境、一人ひとりの発育・発達や健康の保持増進、感染症や事故などへの対応、職員間・多機関との連携などが含まれます。

資料1 保育園保健業務の活動領域



全国保育園保健師看護師連絡会 2005年12月作成

2つ目の柱は、地域の子育て支援への保健的視点からの業務です。この分野は1997年6月の児童福祉法等の一部改訂によって、保育園に新たに求められた領域です。近年さまざまな子育て支援のメニューが増えるなかで、看護職としての役割が求められています。

この活動領域は、保育園だけでなく幼稚園や認定子ども園など、どの保育施設においても、子どもたちへの心身の健康の保持・増進や生命の安全に重要な役割を果たせるものだと思っています。

IV. 健康支援への役割

乳幼児が集団で、しかも長時間生活している保育の場において、一人ひとりの子どもの健康を保持し安全を守ることが重要です。日々の保健活動では、子どもが小さければ小さいほど日常の健康観察を通して異常の早期発見や成長発達を見極める記録の活用等、健康管理が必要です。また、子どもの健康を守るうえで保護者を中心として保育士や嘱託医・医療や療育機関・保健センターとの連携の要を担う役割があります。

1) 子どもたちの日々の健康実態

毎年、産休明けからの低月齢児の入園があります。平成16年度に入園した0歳児9名の月齢です。3か月未満児4名、8か月未満児4名、9か月児1名でした。

このように、低月齢での入園では、入園後に先天性疾患が発見されることもあります。小さければ小さいだけ一人ひとりがきめ細かい対応が必要になります。また、特別な疾患がなくても、全園児105名の子どもたちがいて、日々、発熱・嘔吐・下痢、怪我などでの受診と保育の中では、看護職が必要とされる場面が多くあります。

図1は、0歳クラス9名の1年間の健康状態です。

- ①生後57日目で入園し、入園2W後肥厚性幽門狭窄症のため、緊急手術をしました。
- ②クレチンの疑いで経過観察のまま、3か月児で入園しました。
- ③38Wの1760gの低体重で生まれ4か月で入園し、6か月健診時難聴が発見されました。
- ④湿疹や乾燥肌で保湿を欠かせない子です。
- ⑤たまご・牛乳の食物アレルギー児で除去食対応をしていました。
- ⑥熱性痙攣を11か月と1歳半の2回おこしました。
- ⑦0歳の1年間で肺炎・気管炎を罹患しました。
- ⑧浸出性中耳炎を繰り返しました。
- ⑨先天性疾患があり医療・療育との連携をとっていました。

図1

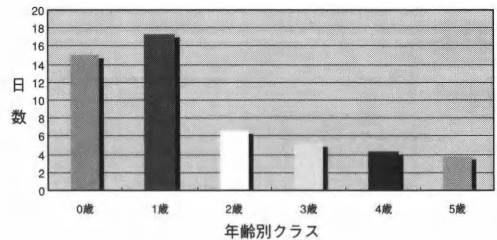


図2 2006年クラス別1人平均病欠日数

す。3歳児以降幼児になっていくと体力もつき、ほぼ10日前後の病欠欠席日数になります(図2)。

4月に乳児クラスに胃腸炎、幼児クラスに水痘が発症し、1歳クラスでマイコプラズマ肺炎の子が出ました。

5月には、引き続きマイコプラズマ肺炎に手足口病。

7月には、プール熱にアデノウイルス、ヘルパンギーナ。

12月には、感染性胃腸炎。

3月には、インフルエンザや風邪などの発熱。

このように、保育園では、感染症は避けて通れない部分です。また、1年間を通し多くの感染症が飛び交っているのがおわかりになります(図3)。この感染症で、中耳炎や結膜炎・脳しょう・難聴とリスクの大きい合併症になることも少なくありません。予防接種・罹患状況の把握や職員の衛生管理の意識の向上や適切な予防対応で感染を最小限に食い止める対策を保育士と連携していく必要があります。また、障害や疾患を抱えている子は感染症に非常に弱く重症化してしまう傾向にありますので、個別の配慮が必要です。

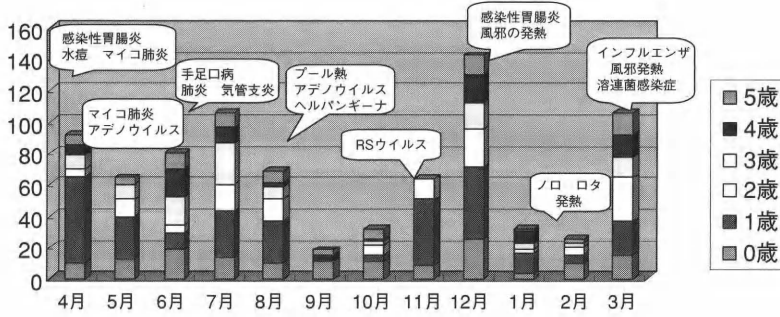


図3 感染症流行状況

3) 保育園における障害や疾患を抱えた子の割合

2001年に行った当会会員に向けた「障害やおよび疾患をもっている園児の実態調査」のアンケート調査の結果です。139園に288人の障害や疾患を抱えた子がおり、1園に2人の割合で入園していました。また、75疾患の内訳では、自閉症やダウン症・全盲の子、水頭症と二分脊椎で内シャントをしている子など、多くの子ども

たちは、重複した疾患や運動・知的障害を抱えていまして、医療や療育との関わりが必要な子どもたちでした。中には命を脅かすほどのリスクを抱えて入園することもあります(図4, 5)。

平成16年発達障害支援法が施行され、保育の場では、心疾患でペースメーカーの入っている1歳児や無呼吸や過呼吸を頻発する子など重症と思える障害や疾患の配慮の必要な子が多くなり、日常の保育の中に大きなリスクが潜んでいると感じています。

アンケート回収187園中139園に288人75疾患
年齢別障害児数

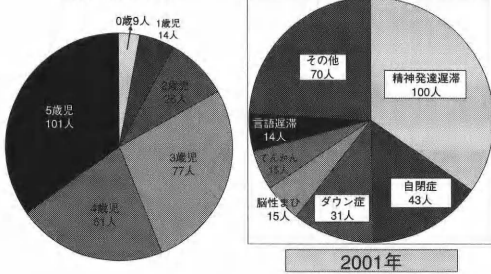


図4 障害および疾患をもっている園児

- ・139園に288人が、75種類の障害と疾患をもち保育されていた
- ・140園に315人が、23種類の疾患で医療行為を必要としていた

二分脊椎	水頭症	ダウン症候群	脳性麻痺	てんかん
言語遅滞	心室中隔欠損	ADHD	レット症候群	広汎性発達障害
情緒障害	高度難聴	聴覚障害	動脈管開存症	弱視 斜視
心室心房中隔欠損症	ファロー四徴症	川崎病後遺症	肺動脈狭窄	単心房
軟骨無形成	左半身麻痺	筋ジストロフィー	精神発達遅滞	全身性ミオパチ
自閉症	未熟児網膜症	先天性白内障	超未熟児	口蓋裂
アルゼンマッハ症候群	ヒルシュスプリング症	ビエールロバン症候群	ベイクウィズ・ウィードマン症候群	僧帽弁閉鎖不全 肺動脈不全
ラッセルシルバ病	ヘルペス脳炎後遺症	ウイリアム症候群	MASA症候群	筋緊張低下
全盲	高ガラクトース血症	四肢麻痺	副腎皮質過形成	免疫不全
声門下器官狭窄	食物アレルギー	アトピー性皮膚炎	クレチン	コルネリア 痙攣重積

障害および疾患を持った園児の実態と保健職の関わり H13年度調査

図5 看護職の関わりが求められる障害や疾患をもった子どもへの対応

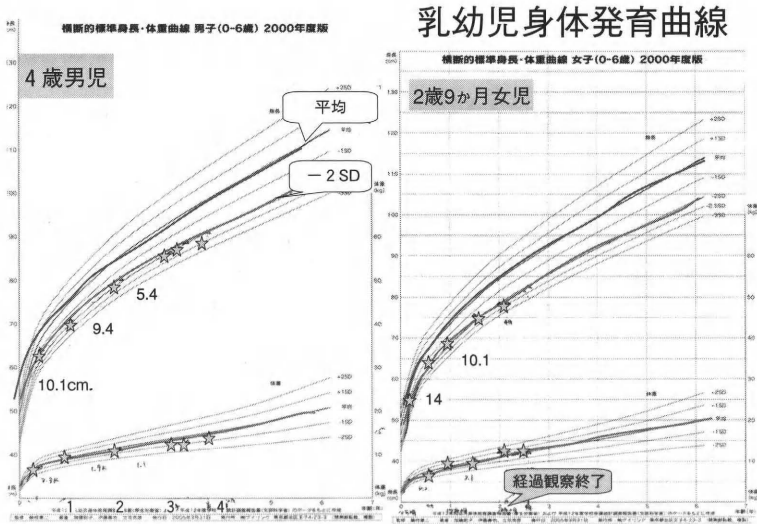


図6 乳幼児身体発育曲線

遠城寺式-乳幼児分析的発達検査表 (小児科改訂版)	
年齢	検査項目
0歳	大運動・身体発達
1歳	大運動・身体発達
2歳	大運動・身体発達
3歳	大運動・身体発達
4歳	大運動・身体発達
5歳	大運動・身体発達
6歳	大運動・身体発達
7歳	大運動・身体発達
8歳	大運動・身体発達
9歳	大運動・身体発達
10歳	大運動・身体発達
11歳	大運動・身体発達
12歳	大運動・身体発達
13歳	大運動・身体発達
14歳	大運動・身体発達
15歳	大運動・身体発達
16歳	大運動・身体発達
17歳	大運動・身体発達
18歳	大運動・身体発達
19歳	大運動・身体発達
20歳	大運動・身体発達

事例 1
8か月で入園したダウン症児

<合併症>

- ・心室中隔欠損症 2か月で手術
- ・外斜視
- ・浸出性中耳炎
- ・気管支炎 肺炎を起こしやすい

<発達センター>

- ・摂食指導
- ・言語指導

<発達>

- ・9か月寝返り
- ・11か月おすわり
- ・1歳8か月2～3歩あるく

図7 遠城寺式発達検査表

重複した合併症があり、医療・療育機関との関わりがありました。

この子には遠城寺式を使い発達の経過や今後の見通しを保育士に伝え、発達に合った適切な保育ができるように共有しました(図7)。

③ 水頭症と二分脊椎を抱えて内シャントをした状態で4歳の時入園してきた子

このように度重なる痙攣や頭囲を含めた身体発育の様子を表すことで経過がわかりやすく、嘱託医や主治医が児の状況を適切に判断できるようフォローするのも看護師の役割で

す。このほかに、毎日の体温や健康状態を記載する表、また、年齢にそった病歴や医療や療育の経過表が使われています(図8)。

5) 保育の安全と事故予防

乳幼児をお預かりしている保育園では、事故防止は重要な対策です。その中でも、SIDSの予防や配慮は重要であり睡眠中の観察表を用い観察を重視するよう保育士への意識づけをします(図9)。

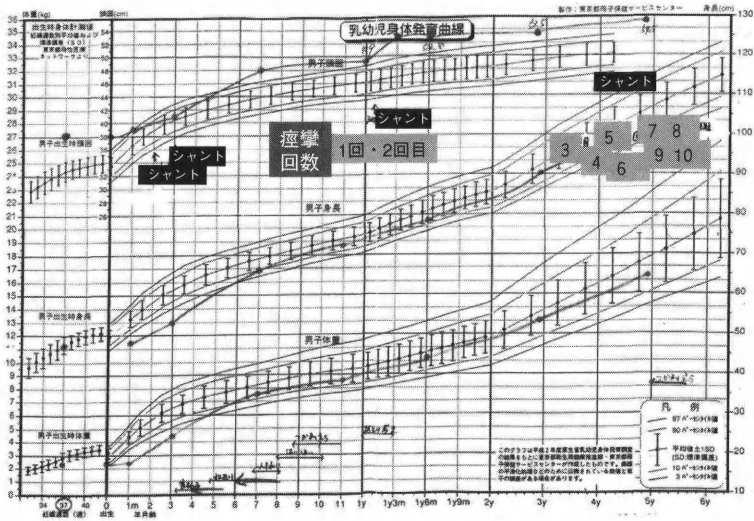


図8 二分脊椎の児身体発育曲線

3月12日(日) 観察者サイン 睡眠中の様子(吐乳 咳 喘鳴 など)
 体位:上向き(✓) 下向き(下) 横向き(横)

時間	9:00	9:10	9:20	9:30	9:40	9:50	10:00	10:10	10:20	10:30	10:40
サイン	藤城	藤城	藤城	藤城	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	藤城
A	✓	✓	✓	✓	咳	咳					
B	✓	✓	✓	✓							
C							下	下	下	下	下
D	横喘鳴	横喘鳴	横喘鳴	横喘鳴							
E	下	下	下								

図9 睡眠観察表

V. おわりに

看護師の立場から保育園の子どもたちのおかれている現状をお話しました。

乳幼児のすべての子どもたちが、成長過程でさまざまな疾患や・障害などを抱えるリスクも潜んでいます。心身の成長・発達が著しい乳幼児を集団でお預かりする保育園や認定子ども園など、どの施設においても、子どもたちの健康と成長発達を支える、健康支援と安全な環境作りは重要なことだと思います。